

特集に  
あたって

子どもの在宅  
障害のある子ども  
ホントに難しいの!?



初めて子どもの  
在宅医療を始める  
医師や看護師の皆さんへ

企画・構成

医療法人財団はるたか会理事長

前田 浩利

Maeda Hirotooshi

在宅医療の世界に飛び込んで17年経った今も、私は、初めての患者宅に訪問するのが好きだ。私は、患者に十分応えられるのかという若干の不安と緊張感と同時に、新たな出会いへの期待に胸を膨らませて初めての患者宅に伺う。ほとんどの家で、患者と家族は、少し不安そうな様子でわれわれを迎えてくれる。私は、できるだけほがらかに少し大きめの声で「はじめまして、あおぞら診療所の前田と申します。どうぞ、よろしくお願ひいたします」とはっきり挨拶をする。

ここからわれわれの在宅支援が始まる。高齢者の人は、残りの人生をできるだけ穏やかに愛するわが家で安心して過ごせるように。がんや難病で予後が限られた人は、残された時間が苦痛なく大切な家族とのかけがえのない時間になるように。そして、子どもたちは、その子なりに成長し、豊かな人生を過ごせるように、そしてその成長が家族の喜びとなるように、患者と家族とわれわれの協働が始まる。どんな患者でも、一人として同じ人はいない。たとえ診断名が同じでも、生活環境、家族の状況などが異なる在宅医療では本当に患者ごとにさまざまなことが起こる。毎回の出合いがわれわれにとっての学びの機会となる。だから、「患者から学ぶこと」が大事になる。

本特集では、「患者から学ぶ」を軸に小児在宅医療で遭遇するいくつかの代表的なケースを取り上げ、執筆者の方々がそのケースに出会い、戸惑いながらどのように対応していったのかを含め記述いただいた。本特集が、障害のある子どもの在宅医療に初めて飛び込む読者にとって、少しでもその助けになることを心から願う。